
アトガタリ

陸猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アトガタリ

【Nコード】

N9539S

【作者名】

陸猫

【あらすじ】

魔王に支配された時代は終わった

1 (前書き)

かなり正確な設定が出来ているため失踪はしないかな

魔王アークが倒され、3年がたった。アークを倒した者は勇者と呼ばれるようになる。そして物語はその後の事。カッカラ山を少年が一人で上っていた。「勇者さくんいたらへんじしてくださーい勇者さくん：はあ」俺はルギ、勇者に弟子入りしようと思って来た訳だが、勇者が見当たらない。と、思ったが…いた」この草一つ生えてない岩山でなにしてるかしらないが勇者は頂上に立っていた。「あ…あの…勇者さんですか？」「…？俺はキリノだけど？」「やっぱり勇者さんですね！！単刀直入に言います！！俺を弟子にしてください！！」「…いいよ」「やはりだ…え？い…いいんですか！？」「だけど話してくれ、なぜ弟子になりたいのか」「…：強くなりたからです」「魔王と戦える位にか？」「俺の敵は魔王じゃありません」「…敵？」「昔…俺のすんでた村は盗賊に襲われて…その時なにもできなかったから…弟と共に修行の旅に出たんです」「…弟？」「レギっていつて父親は違えどなかは良いですよ。強いし…まあ喧嘩で俺に勝ったことはありませんけど」「弟は今どこに？」「あ、勇者さんがここにいてるって教えてくれた人の所ですえっとクイツクシティですね」「弟はそこで何を？」「さあ？盗賊を懲らしめるとかいってましたけど？…勇者さん？」「…勇者さんってのはやめてくれないかな？」「ええっとじゃあ師匠？」「よろしい…さてと…刀を捨てなさい」「はい？」「いいからかたなを捨てなさい」「ほらっ」持っていた刀を捨てた。「そんじゃ始めるか、風刀流を」「ふうとうりゅう？」「風刀流は風を刀として持つ流派、そして基本となるのがこれ」師匠は空を掴み「剣」を抜いた「すごい…」「すぐできるよになるよ」師匠はそういうと刀を空という鞘に戻した。

1 (後書き)

失踪しない、俺はしない

飯は自給自足だとおもっていたら麓の村でちよくちよく買物をするらしい。しかしこの人本当に勇者なのかな〜と思いつつ買物：「キヤアアアアア！！！」「な、なんだ！？」「人殺しいいいいいい！！」「みると山賊が右手に血の流れた刀を持っている。ちかくには男の首とからだ。「けっ山賊じんべえ組にさからうとはな」「おかしら〜店の中は金目のものないですぜ」かずは7、8人：って所だな。師匠の方を見ると、最初とは全くちがう人相になっていた。鬼だ。俺は刀を抜こうとするが：あ、すてたんだっけ山賊がこっちに気づいた「なんだてめえら」「逆らうなら容赦しないぞ」「師匠：」「ルギ：俺の後ろへ：良く見ておけ」「はいっ」師匠は俺にはとぼけた表情をした。そして師匠は空より刀を抜いた。「へえ奇妙な術つかうじゃねえか：まあいいや：死ねやアアアア！！」その後の師匠はあまりに早い速度で山賊を全部切り捨てた。「ふう：怪我ないか？」「え：あ：無いです」「そう」流石師匠だ：。盗賊はみんな死んでいる。「そんじゃもどろうか」空を：抜く：「こうか：？」空中をぐっと掴んでひきぬいた。薄いがたしかに出来た。「やった！！」「：。驚いたなこんなにも早くこの刀を抜くなんて」カッカラ山に戻り修行再開。まずは安定しない刀を凝固させる事からだ。

2 (後書き)

修学旅行記かないとなー

あれから一週間、刀は刀らしくなった。師匠と似た色の白さだ。そんなとき師匠に一通の手紙がとどいた。内容は「○×日にリコの港へ来い」差出人は：ライキ！？「ライキってあの極悪ライキですか！？」「……ちがうよ、ライキはもう極悪じゃない。行けばわかる。ただのロリコンだから」「……（汗）リコの港は一度クイックシェイを通る。故にクイックシェイにいるわけだが「キリュウ、久しぶり」「兄貴：久しぶりだな」髪の毛をしばり頬のは傷跡：「え？兄弟だったんですか！？」「そうだよ、ええっとこの子は：」「言わなくてもいい」「あ、なんで兄貴がここにいんだよ」「あ、レギ：いちゃわりーかよ」「わりーよ」がるるるr「兄弟げんかかくなつかしいな」「それよりおまえの所にもライキから手紙が？」「ああ」「…。なあ、ルギ成長したか？」「うゝんかなりの速さで成長した」「マジでか？」するとレギが剣を抜いた「やい兄貴！！今日こそてめえに勝ってやる！！」「おいおい真剣抜くやつがあるかよ；」「行くぞ：」「兄貴：止めるか？」「いやいい」「でええええええええええい！！」空から刀を抜き受け止めた：なるほど「竹刀ならきれてるな：」「ちつまた俺の負けかよ」「お前は会うたび切りかかってくるな」「いつか絶対倒してやるかな」「レギ：行くぞ」「あ？ああリコ湖か」どうやらキリュウさんはレギをつれあるいてくれるらしい「あの：キリュウさん」「なんだ？」「少し：お話させてください」「：わかった」「おいおい兄貴、変な話吹き込むなよ？」「わかってるさ」俺たちはキリノとレギと少し離れた。「良い目だな」俺はキリュウを睨んだ。「一太刀あびせたいのか？」「今のキリュウさんにそんなこと出来ません。弟の恩人ですから」「その弟を苦しめてたのも俺だが？」「10年も前のレイプを思い出せというほうが無理がありますよ」「父親だと分かった今、俺はあの馬鹿にいろいろおしえなきゃならん」「…安心しました」

3 (後書き)

国語の教科書と理科の地図をくええええええええ

「レギ…だった？ルギと中いいんだね」「よくねーよ」「良いよ？
だってルギ弟の事しんぱいしてたもの」「心配…」「うん」「けっ
…なんで俺なんかの心配すんだか」「そりゃ兄弟なもの」「半分の
な、俺が生きてるせいで兄貴は不幸な目になんどもあってるんだぜ
？」「たとえば…？」「飯…へらされたり…俺の事かばって殴られ
たり…俺の」「ふうん。まあ俺は弟大好きだけどね」「恥ずかしい
奴だなお前」「いろいろあったよ弟とは、普通じゃない喧嘩もした
し…」「まさかその眼帯…」「うん。キリユウがやった。でもその
あとキリユウあわてて看病してくれてけどね」「…：…どういう経緯
だったーの」「10年ほったらかしにされたら誰だって怒ると思う
よ」「…まあまたいつか聞く」「そうか…」「俺たちが戻ると二人は
なにやら切なそうな顔をしていた」「話、終わった？」「ああ」「ええ」
「そんじゃ行こうか」

リコ港につく前の森で事件は起きた。ゾクッ！！とんでもない悪漢がした。「どうしたルギ？」「え…？」「一瞬凄いいびつくりした顔になったけど？」「な…なんでもないです」気のせいだろう、その時の俺はそう思った。森を抜けるとリコ港についた。一際目立つ船が見えた。「あれ…ですか？」「うん」「かっきー船だなー」「そうか？」そして船の中へ「良く来たな！」海賊、上雷の船長ライキだ。「こいつらは？」「弟子」「…。オマケ」「弟子だろーが」ロリ娘がやってきて「こんにちはー」「どうだかわいいだろう」「いいから本題に入れ」部屋に入ると「ライキ…さっきの森で妙な連中が俺たちを見ていた」「ああ、わしも近頃やつらに狙われとる」「じゃあ、さっき俺が感じたのは」「詳しい事をしりたくて森での戦闘はさけた」「やっぱり」「奴らの名は…エンドリスト」「ライキさんは服を脱いだ。包帯が巻かれていた。「な！？お前その傷！？」「奴らにやられた、質問にこたえただけだな」「質問？」「「お前は勇者の仲間か」だ」「！？」「それってどういうことだよ！！」「わからん、が、スミレンとこでも妙なことがおきとる」「スミレンって誰ですか？」「モミジの森の魔法使いだよ。かなり強い召還獣をあつかえるんだ」「あいつのところで勇者は誰だと聞いて周った奴がいる、スミレもこのとこ妙な気配がするという連絡をよこしてんだ。」「何かある…」「何か分かったらすぐ連絡してくれ」「わかった」

ゾッ……！！！！！！なんだ？この感じ……「どうした？」「……寒気が少しただけです」思い過ぎ……？「寒気か……中途半端に強いとそういう感じ方になるのか」「え……？」次の瞬間だった。「ぎゃあああああ！！」外の見張りが悲鳴をあげた。外へでてみるとそこには切り殺された死体と人間のような……モンスターとモンスターたち「ほう三人か」「5人だ」「挑発にのるなレギ」「ククク……まとめ殺してくれるわ！！」「ザコモンスターは恐らく船に残る者をかばうという寸法だろうかだがライキさんはさっきのロリ少女のミライちゃんを守るよう全ての仲間がいい別の場所だ。さすがに「勇者」のあの三人を倒せるはずもなく奴は闇に消えた。

「奥義、土雷地震!!」ライキさんは地面を叩きわった。中におちてゆくモンスターたち、だがモンスターはまだまだいた。「冬の形、雪崩!!」キリュウさんの刀からは雪崩が放たれた、がまだまだいるモンスターたち「きりがない…ふせてて!!」「おまっ!!まさか…」ライキさんとキリュウさんが青ざめてた「風刀流奥義…」ライキさんに無理やりふせられたレギもだ。「大嵐!!」物凄い風とともに白い刀、風刀が大量に舞い踊りモンスターたちは次々と切れ倒れていく。って危な…!!ぴっ….:.頬に刀がかすった。おわった後まず師匠以外全員でほっとした。そして「おいこらテメェ!!危ねーだろうが!!」「ごめんごめん皆…大丈夫?」「いたた…」「!!ルギどこか怪我したのか!?!」「ちょっとかすっただけです、このぐらい平気ですよ」「でも…」「てめえの大嵐で身内に怪我人出なかった事ないだろうが!!いい加減学べ!!」「ポコッ」「うにゃ….:.!!」

とある森の中にある村に行く途中の事だった。何かが師匠に向けて飛んで来た、キンという刀音、そして地面に落ちるクナイ。「誰だ」「我らはエンドリスト、ここではお弟子さんが邪魔で本気が出せぬ。ついてこい」エンドリストと名乗った忍者は消えた。追って師匠も消えた。そして走る、悪感、寒気。後ろだ、直ぐ様振り向き空の剣を抜き、構える。「へー思ったよりやるじゃんか」土が黒くそまりなかから出てきたのは人形モンスター。「何の用だ!!」「用ならある。死ぬ」赤く塗られた爪で襲いかかってきたが紙一重で交わした。「ちっ」「くっ!!!!」交わしたのはいいが迎え打てる強さじゃない!!師匠が戻るまでたえられるのか!?!ざっ!!!!肩に一撃食らってしまった。「う……………」痛い、が今痛いからと踞れば殺されるのは明白だった。こっちからも攻撃をするか?!?キン!!!化け物の爪は俺の風刀と互角に交えた。くそっ……………なんつー重さだよ……………その時「ひけええええ!!!!」と聞こえた。何だ?…奴も土の中に戻って行った。

8 (後書き)

Q、全角か半角にしろ

A めんどい

その場に膝をつき崩れる。その後ししょ……う……が……。目が覚めた。「大丈夫か!？」「師匠……ここは」「あんたの探してた村よ」「ええと?」「あたしはスマイレ」「……………」ズキッ「ツ!？」「大丈夫か!？」「平気です……」「肩は5日もすれば治るわよ、若いから」「5日……」「まあ大人しくしてなさい、キリノも腹に切り傷入れられたから全治5日、こっちは傷は浅くても治りが遅いのよね」「これぐらい平気だ」「おにーさんたちおきたー?」「兎の帽子に口元を隠した魔女ローブ」「カヅキ、このお兄さんたちを見張ってね」「はーい」しかし奴ら何者なんだろうか?深呼吸をして落ち着く。3日たったらもう傷はほぼふさがった。「もう平気ですよ……」「だあめ!!あと2日我慢しなさい」「このぐらいの怪我は修行には付き物ですから平気で」「こんな怪我させる修行やらせた覚えはないんだけど……」夜中、こっそり外へ。風刀はより白く安定していた。死ぬかもしれない戦いをしたんだ。成長するだろう。こっそり素振りをしながら微かに自分が笑っているのが分かる。まだまだ俺は弱い、そして師匠の足を引っ張る弱さ。がさつ……………」師匠」「病室に戻れ」「これしきの怪我で休んでなんかいられませんよ」「いいから戻れ」いつもの師匠の裏の顔で言ってきた。でも「俺はすぐにでも強く……………」ドスッ!!腹に一発お見舞いされ気絶した……

9 (後書き)

これbLだからね？ bLなんだからね？

腐女子が書いたら腐臭がするにきまつてるだろ

きがついたら朝。ええっと「おきたの？」「師匠：他にやり方なかったんですか？」「なんか説得できそうになかったし」「そうですか：」「もう！！お兄さんだめだよ外にでちゃ！！安静にしてるんだよ！？」「ところでカヅキちゃんはある危険な奴らには狙われてないよね？」「あはは大丈夫だよ！！あたしこうみえても結構強いから」「結構強い：傷が治ったら相手してみないか？」「うん、いいよ。でも傷ふえちゃうかも：」「本気心配するな、悲しくなる：：：」「ようやく傷が治り、カヅキと練習試合をする事になった。「いくよ」ザーツカヅキは杖で円をかけた「うきやー！！」するとカヅキの帽子はモンスターへと変わった。「凄い」「うきやー！！」「召還獣はね！！倒されても魔界に帰るだけで死ぬことはないのよ！！だから全力で来て！！うきやー！！とビックリ！！」「うきやっドン！！うきやーの足から光がとんできたが交わし、尻尾を狙う「マルハンマー！！」尻尾は円を描き俺の頭上にがツンと決められた。「うっ」「そこまで！！あんたの負けよ」「：まだやれるのに」「まあまあ」

10 (後書き)

モトネタはメイプ…ゲフンゲフン

カッカラ山に戻って来た。しかし何故水はあるのに草木がないんだ
 ろうか? 「今日は風車を教えるから」 「風車?」 「見てて…」 目を
 いつものポケーっとしたのから鬼の形相へ。 「風刀流奥義…風車!
 !」 シパッ!! 岩に一撃で四回切っていた。 「凄い……………」 「まあ
 練習すればそのうち出来るようになるから」 はしりこみをした、が、
 穴を見つける。なんだこれと覗いた瞬間突き落とされた。 「なああ
 あああああああ!!!!」 「穴は異常に深い、地面につけば骨折
 じゃすまない。すると見知らぬ人に身体を抱き抱えられた。そして
 とすんと地面に置かれた。 「あ、有り難う御座います」 「なんであ
 んなとこから落ちてきた?」 「修行してたら誰かに突き落とされた
 んですよ…」 「修行…ひょっとしてキリノと何か?」 「師匠を知っ
 ているんですか?」 「と…恩人」 「友達?」 「恩人だ」 「友達なん
 ですね」 「…………向こうはどう思ってるかしらんがな、いや、あい
 つの考えなんて一生わからんだろうな」 「……………」 「どうした
 ?」 「いえ、なんでこんなところに」 「人」 がいるのか不思議で…」
 「…………人じゃないさ」 「そうですか」 「…………驚かないんだ
 な」 「あの距離を落ちたのを受け止められる人なんてめったにいま
 せんし…」 「…キリノ(あいつ)の弟子らしい奴だなお」 そのとき
 「アーク様——!」 どちらですか——!」 「アーク…? アークって魔王
 の名前だよな……………」 「ま、まさかこの人…顔面の体温が下
 がる。でも勇者に倒されたんだよな?……………」 「あ、アーク様!
 !と、なんですかこのガキは?」 「ガキじゃないですルギです!!」
 「ルギ……………」 か、で、アーク様、何たってこのガキこんな所に?」
 「突き落とされたって事らしい」 「『突き落とされた』っていった
 って…なんであんな山に?」 「キリノの弟子らしい」 「証拠は?」
 「無い」 「そーです…かっ」 ソイツは刀を抜いて俺に切りかかって
 きた。直ぐ様空から剣をぬき、受ける…あの赤爪のエンドリストの

攻撃なみに重い気がした。「成る程、確かに風刀だな」「危ないでしょ!!」」「「モンスター相手になに言ってやが…」」「やめろクロボシ!!」」「……………はいはい」「キリノの所に戻るにはこっちだ」「……………」」「こっちだ」アークにつれられた先には滝。「この先だ」「ひとつ、聞いていいですか?」「なんだ?」「……………魔王…アーク…ですよ?」「……………」」「すみません、こんな事聞いて…」」「いやいい。隠すつもりもないからな」「……………」「帰りますね、送って下さりありがとうございました」

11 (後書き)

きやらの喋り方なんて気にしたらまけ

12 過去編「魔王」（前書き）

過去編です

12 過去編「魔王」

3年前の記憶が走馬灯のように蘇る、50年に一度の天地の入れ替わり、50年で魔王は君臨、50年たてば勇者に倒される、「システム」がこの世界、故に倒される覚悟はあった、父、魔王に性別は無いが父として記憶に残っている。父が切り殺されたその刀で俺も死ぬのか…そう…思ったんだ。「6人の勇者」と「魔王」の戦いでいままで崩れる事の無かった所が崩れた。息子のダクウがいる場所が。50年の掟が破られたとき、世界は「人」で溢れたあのころに戻る。人が人に自らの「悪」の印をつける時代^{トキ}が、故に息子と共に土砂流に巻き込まれた、これで俺が死んで息子が生きればそれでいい、そう思った。目が覚める「う…？」息子はすやすやと寝ている。そして「勇者」の一人が目の前で…子供泣きしていた「お、おきた？」さっきまでへらへらしていたよくわからない勇者が急に大泣きしてそんな事を言うもんだから「は？」と言ってしまった。「おきたああああああ」ぎゅううううううう…ってだきつくなあああああああああ…！！！！…なんだこいつ！？…勇者じゃないの…いや…強さは勇者に違いない、じゃあなんなんだこいつは！？「クライ怖いクライ怖いクライ怖い（略）」たしかに人間の目には真っ暗な暗さだな「お前…誰に向かって抱きついてやがる！？／＼」「アークだよ！！！！」「びええええええ！！よけい泣かせてしまった…；え？いや魔王だから泣かせるのは当然じゃ…あれ？…こいつも土砂に巻き込まれたのか？こいつの力量（速さ）なら当然交わせた筈だ、何故…「ふぎやああああ」「あ！！いいいいいこ」「だあ♪」何いいいいいい！！？息子は勇者に撫でられている、そして機嫌がよくなる。いままで絶対的になかったであろう光景。「魔王なでる勇者なんて…聞いた事が無い…」「アークもなでてほしい？」「はあ！？；／／／」なでなで、な、え、あ、う、…は？えええええ！？；；；「お前…魔王をなんだと思ってるんだ？」「魔王？モンスターの頂点」

「だったら!!」「だったら?」なでなで「それを…」奴は笑った。
「本当は何か事情があつて魔王なんでしょ?」「!!!」「もうこんな辛い事やめなよ?ね?」それを聞いた俺はこの50年という物がなんなのかを答えた。「…」「どうだ、コレが理由でも止めると言うか?」「言う」「…なぜだ」「だってそれじゃアークが今日死ぬ事になるもの」「……いいんだよそれ」「よくない」「…この状況でどうやって出るんだ?」「出れる、その50年のシステムを完成させなきゃ、でしょ?」「そういうとキリノは息子の頭を撫でた:そうか、こいつだけは助け」「アーク、君を助けない」「は?」「皆一緒にでよう」「助かる方法があるみたいない方だな」「あるさ」その時天井が赤くなった。「アークの仲間はアークが好きだから」さめては赤くなり、さめては赤くなる「封印してあげるよ、そのふざけたシステム:風刀流奥義:天殺!」キリノの天殺は天まで届く刃、分厚い天井が壊れる。仲間に引き上げられて笑う、皮肉なもんだ、父を殺した技で助けられた。しかも殺されたその日に。「ごふっ」「!?!」キリノが血を吐いて倒れた。思い返せば腹には俺がやった刺し傷がある。「こいつ:どうしま」「助ける」その自分の答えと共に見えた青空、初めて見る青空、キリノは魔王城で目をさまして:他の奴らが大変だ:そして5日後「なあにい?まだ0才の息子がいてかばって死ぬ気だったあ!?なんていい奴だ!」「兄貴のダチはきれねえ」「この馬鹿がお世話になりました」「キリノがいうなら」「キリノがいうんじゃない?」「どゆこと」「なんで納得できるんだ?」「」「」「たしかに。あれじゃ泣かせられないよなというじゃない」「」「」「たしかに。あれじゃ泣かせられないよなというか泣くなよ…」
それから三年
「魔王様、笑ってるぜ今日」「何かいい事あったのかしら」:いい事か、三年前の今日の出来事を思い出ただけで口元がゆるむんだ:ザー、上から雨、「へっへーん成功だぜ!!」「やめなよダクウ」正確にはバケツの水「お前等:いいかげんにしやがれえ!!!!!」(怒)「へっへーんにげるぞ白星!!」「僕も!?!?!」「いいからきやが

れ!!」二人はすぐさまどこかへ、一息つき…笑った

12 過去編「魔王」（後書き）

やっと過去編の一人目、最もこの人（人じゃないけど）が短いです

13 おまけ(前書き)

み
じ
か
い
お

13 おまけ

「へーそんな事があったんですか」「本人から聞けよ聞きにくるなよ；；」「師匠が本人に聞いてって泣きそうな顔で言うんですもん」

「泣きそう：？」

数分前、「師匠、アークさんと友

達なんですか？」「そうだよ」「じゃあ…いきさつをぜひ」「うゝ

ん…（アークに最近あってないな〜ま、まさか寂しくてママ〜って泣いてるんじゃない？でも強がって俺がいたら泣けなくなってる…本人から聞いて」うるうる「わ！？；；分かりました！！；；」

そして今「な…事がありました」「とりあえずキリノ（アイツ）の頭があいかわらずなのは分かった；；」

13 おまけ（後書き）

ね？

14 レギ編(巻) (前書き)

キリユウに助けられたルギとレギ

14 レギ編(巻)

「大丈夫か?」 「あ、ありがとうございます」 (兄貴がお礼を言ってるソイツには、特徴的な顔の傷) 「ヤロウ:!!」 「まてレギ!」 「刀を抜くの止められた。俺たち「勇者」を探しているんですがしりませんか?」 「:知ってはいる」 「教えてください」 「何故だ?」 「弟子にしてもらいますよ」 「弟子:」 「おい兄貴!!」 「なんでとめるんだ!」 「お前じゃ勝てない」 「はあ!?」 「それに思っている人物じゃないかもしれないだろう?」 「けど:」 「お前はこの町に残れ」 「い、言われなくても残るさ」 「なんなんだこの兄弟? こっちは盗賊な訳だし恨んでいる奴らはいらるだろう。兄の方をみていると小さい頃の兄貴を思い出す。」「:「勇者」ならカッカラ山だ」 「!:、ありがとうございます」 「兄貴の方はそれを聞くと行ってしまった。弟の方は納得いかないようで顔をしかめた。すぐさま裏道へ行かれた。あいつの目が気になってしょうがない、身長からして9、12くらいだろうか? しかしあの目は人を2、3人は殺してるだろう。気になって後を追った。ビルの屋根に乗り、通りを眺めていた。となりにきて目をおう、男ばかり見ているかとおもえば子供づれの男ばかり見ていた。」「父親でも殺されたのか?」 「その声にあいつは驚きすぐさま刃を構えた。」「そうなのか? 餓鬼」「違う、餓鬼じゃない」 「:名前は何?」 「レギ」 「レギ:なぜ俺を狙う?」 「:。」 「まだ言えないか:」 「レギは剣を鞘にしまった。そして抱え、俺からさっきまで見ていたものへと視線をかえた。俺の攻撃を誘おうという事か: ?ん: ? あいつは小木じゃないか? しかもこっち見てやがる。いつのまに牢屋から出てきやがったんだか: アジトに戻る。」「おかえりなさい!!」 「:」 「アジトといっても仲間は三人なのだがな、しかもモンスター。:一晩たってあいつの様子を見にいった。いねえ、しかもこれ:血痕だな。ちかくにいた人に話を聞く、俺は盗賊といっても「勇者」という看板もある。故

にここいらの盗賊は俺の管理にあるため治安もそれなりに収まっているため町の間とは普通に話せる。「ちょっと尋ねたいのですが……これくらいの身長の子供で刀を持った子しりませんか?」「ああ……さっき腕に妙なもんつけた怖いにいさんが肩に子供かかえてたけど……」「ありがとうございます」腕に妙な……昨日のアイツか。あいつは仕込み刀を腕につけているからな。だとすると厄介な事になる。おそらく俺の仲間だと思ったんだろうな……奴のアジトへ行くとやはりレギがいた。ぼろぼろじゃねえか!?「良くきたな……息子を手助けに来たつもりだろうがそうはいかねえぜ?」「お前を始末しに来ただけだ」どうやら息子だと勘違いされ……まさか……「夏の型、津波!」「シパッ!!」小木を半分に割った。ころがり落ちるボスを見て盗賊どもは逃げ出した。「やっぱキリュウの奴はばけもんだあああああ……!!……」「ひいいいい!!……」「まさか……「お前、年は?」「……今日で10歳になる」10年前の今日、俺は……たしか……女で遊んだ。そういう事か、小さい頃の俺たちに似ていても不思議はない。「父親の名は?」「……キリュウ」静かに、はっきりと言った。「やっぱりか……どうするよ?」「俺を……」「?」「俺を弟子にしようがれ!!」「はあ!……?……」「てめえが使った奥義教えろ!!」全く……息子だとわかると昔の自分に見えてしょうがないな

14 レギ編(壱) (後書き)

なあ、有千島全く書いてないのに9千アクセスいっちゃったんだよ、
どうおもう？

アプリ姫から城への招待状がとどいた。師匠だけでなく俺にもだ。「アプリ姫とお知り合いで?」「うん、友達」城にいつてみると「なんだよ兄貴もいるのかよ」「そういうレギこそなんでいるんだ?; ;」「今日こそ一本いれ:」がツン!レギの頭にたんこぶができた。「なにすんだてめえ!!」「こんな所で兄弟喧嘩するな!!」「ちえっ」そしてアプリ姫の元へ「キリノー久しぶり!!」「久しぶり、アプリ」「姫様を呼び捨てするとは!!無礼な!!」「良い!アプリも姫などと呼ばれとうないじゃろうし、なにより国を救った英雄をどなる気はせん」「お父様わかつてくれるのね♪」「だからぱぱと」「やだ」なかのいい親子だなー。「で、をほん。今日はアプリの護衛をたのみたいんじゃ」「兵士で十分なのは?」「怪盗ベル」をおぬしも知っておろう?」「うん知ってる」「これを見てくれ」国王は紙を見せてきた。『○月×日の満月の晩 姫の命を頂く 怪盗ベル』:怪盗ベルって黒いシルクハットに黒いマント、金色の鈴の怪盗「偽の予告上じゃろうがな」「え?」「ベルはそんな事しないよ」「師匠、ベルを知っているんですか?」「知ってるよ6人の勇者の一人ベルだから」「ほー」「宝石はたかが宝石じゃ、くれてやる、じゃがアプリだけは譲れん」「わかりました、調べてみます」○月×日の晩という事は今日はまだだ。案内されたへやへ。「えっと:子づれの方2名ときいたのですが:」2人のあいべやが二つ、「ルギ、レギと寝てくれ」「え?」「キリユウと大切ななしがあるから」「わかりました」「ちっ仕方ねーなー」二人はいつたい何を話すんだらうか?

15 (後書き)

ねるねるね○ねうめえ
W
W
W
W

コンコン「どうぞ」がちやりと戸をあける。「ひさー」白い髪に猫のような耳、「くうちゃん!!」「くう…」「あれ…きらわれちゃった?ぶらこんさんに」「誰がブラコンだコラァ!!／＼／＼」

「それよりくうちゃん、どういう事なの?」「こっちがききたいよ」「だろ、お前の字じゃなかったし」「こころあたりなにかない?」「そういえばこのまえ「勇者」を狙った事があったよな?」「え!?!:まあでもみんな強いし:;:」「ライキは負傷、兄貴は全治三日」「キリノが全治三日!?!:;:」「もしかしたら「勇者」のお前を狙ってるのかもしれん」「:もう少し城の中探ってくる、ついでに」ガチャ☆目が合って青ざめる俺とレギ「聞き耳たてる子のお仕置きもね♪」「ご、ごめんなさい!!」「ちえっ:」「ゴツン×2あははお花ばたけだあははは綺麗な川だなくおじいちゃんだくお〜い「キリユウ、やりすぎじゃない?」「いいんだよ、こん位でくたばるようなコイツじゃないし」「うう:;:?」「ほー、自力立ち上がるとは凄いじゃねえか」「他に無かつたんですか:」「睡眠剤あるよ」「普通先そっちで:!!!」「意識が遠のいた。嗅がされたんだと直ぐに分かった。

16 (後書き)

めい〇る最近やってないな

さいきんるる剣を見ました。だって技かぶりそうだったもの

「天殺」は迷ったよこのままの技名にするかどうか。まあでも「瞬」
ついてないしいいか

夜だ、くうの言ってた事が本当ならそろそろ奴らは仕掛けてくるだろう。パパパっ城の証明が次々と消える。そして煙、があっという間に広間をおおった、そして恐らくエンドリストであろうそいつは人の形をしている「怪盗ベルにつぐ、貴様が命を差し出せば姫の無事は保障はしてやる」即効性の睡眠薬「風刀流：奥義：！！」煙を吹き、切る「舞扇子！！」煙はすべてとは行かないが窓の外へ。

「はあ：っ」煙のあまりに強力な威力にマスクをしていた兵士全員が眠りにおちている。くろもねていた、幸いしたが：「：」「ふむふむ、怪盗ベルを始末する気でいましたがまさかあなたたちがいるとは：」キリユウも目をあけているのがやっただろう、俺も今にも倒れそうだ。「ふん、勇者とはいえこのガスに立ち向かえる人などいない」キン！！風刀ははじき飛ばされた。勢いをおさえこんだ反動で地べたに落ち：俺の首に向かって刃は降りてきた。

17 (後書き)

そしておやくそくへ

ガキイン！刃は振り下ろされることなく刃でうけとめられた、そう
「お前は…？」「…ルギ」風刀によつて、「師匠！！詳しい事情く
らい聞かせてからねむらせてくださいよ！？まだまだいいんで
くたばらないで下さいね！？」怖い、恐ろしい…でも逃げれない、
ピシッ！！風刀に傷が入る。「シネッ」パキィ！！折れた瞬間だっ
た。「秋の形、モミジ！！」ザンッ！！そののからだには5つの
赤い線が薄く走った。すぐさま距離をとり風刀を抜く。「へえ…俺
様に傷を…だがもう通じねえぜ？餓鬼」「うるせえ！！餓鬼じゃな
い！！レギだ！！レギ！！」「挑発にのるなレギ！！」「ドスッ！！
ソイツはレギの腹に蹴りを入れた。レギは床に叩きつけられた。「
グッ…！！」「ふん、こざかしいガキだ…」「てめえっ…！！！！」
ドスッ俺もくらいレギのとなりへ吹っ飛ばされた。「仲良く死なせ
てやるよ」ゆっくりこっちへあるいてくる「おい…兄貴」「…」
まだ技は残ってるか？」「ああ、だが」「残ってるんだな…タイミ
ング、まちがえるなよ？」「何を…？」「何をごちゃごちゃいつて
…」「冬の方…幻影！！」「レギの分身がそいつへと襲い掛かった。
「ただの目くらまし…」ザシュッ！！幻影はそいつを切った。「何
！？」「レギの幻影はすでに攻撃をしかけていた「なめるなよ！！」
レギの幻影を切り、背後のレギ自身の刀を防いだ、そして「奥義…
風車！！」上からの俺の攻撃が直撃した。かなりグロイ事になった
ので説明は省こう…「レギ…大丈夫か…？」「平気平…ゲホッ…ゴ
ホッ…」「血い吐いて平気って言うなよ！！」「う…？」「師匠！
！」「良かった…まにあったらしいね」「それよりレギが！！」「
ん…？」「キリユウも目を覚ました「おい馬鹿弟子は！？」「内出血
が酷い…」キリユウさんはレギの身体に薬を使った。「ふ…ふ…
…」ゆっくり目を覚ますレギ。「よ、良かった…」

18 (後書き)

母の日に白いカーネーションをあげたい自分

城での出来事を終えて、カッカラ山に帰ってきた。城に「勇者」がいてはいつエンドリストに狙われるか解ったもんじゃないからな。けどまだ俺の身体は回復していない。師匠は無傷、故に気になるのはレギだ。レギはあの時：刀を抜くのを躊躇していた。起きてからも何かおかしかったし：どういう事だ？夜を2つ超えた。俺はもう回復していたので素振りをする。走り込みもするが「穴」のそばには行かない。「やっほう♪」知らない不審者に話しかけられた。カエルの帽子に師匠と同じ服：「こんにちは」「ここいらに「キリノ」がいる筈んだけど知らない？」「……………」師匠ならあなたが出来たとたんに岩影に隠れました。とは言えない。「この近くですよ」「君、キリノの弟子？」「ええ、一番弟子です」「そう……………!!」その人の指が俺をデコピンで弾いた。ビシッ!!「いたっ!?何するんですか!？」「僕が期限良くてよかったね、キリノでておいで」デコピンで師匠が隠れていた岩を砕いたその人。「はい!?!?!」「う……………」「久しぶりー馬鹿弟子」「お久しぶりです師匠……………」「師匠の師匠なんですか!?!?!」「そー、この馬鹿修行の途中でどっか行きやがって：君、風刀つかえるの?」「使えるさ!」空から刀を抜く。「あらあら全然駄目じゃん!」「シパッ!!俺の風刀はその人の「袖」に切られた。「なあ!?!?!」「なんでおどろいてるんだい?当たり前だろう?僕の風刀の切れ味の方が君の風刀より上なんだから」「風刀：はい!?!」「全く：基礎も教わってないのか!」「基礎……………」「風刀は形有る物にあらず」「?!!?」「空気に形がないのと同じだよ!」「ニコニコニコニコ、「そうそう、自己紹介がまだだったね、僕はケロベルト、よろしくね」「よ、よろしくお願いします」「…いたた……………」「?どうされました?」「腰が痛い」「へ?…おいくつですか?」「120」即答、絶句「冗談はよしてください!」「冗談なんて言

ってないよ」「……」（童顔だなー）そして忍びよる、スパーク
ット軍団（通称電気ウサギ）「あ：電気ウサギたち登ってきてます
よ；；師匠、どうします？」「えーっと………まだまだだから怪
我したらいけな……！」「スパーク！！ケロベルトの蹴りは師匠を4、
5ぶっ飛ばした。「そんな甘い育て方じゃ駄目だよ？」ニコニコ、
こええ………；そして強い。「戦いなさい、大丈夫だよ100分の
99殺しくらいになったら助けたげるから」ニコニコ。「それ殆ど
死んでるじゃないですか……！」「なんて会話をしているうちに電
気ウサギの電撃が飛んできた。紙一重で交わした。ザシュ！！五匹
のうちの一匹の首を跳ねた。降り注ぐ雷、だが電気ウサギが放つ電
撃は比較的遅い。全て交わして：ザシュ！！二匹目の首を切り落と
す、しかしバチイ！！背中から電撃を受けてしまう。「うあ、あ、
ああ………！！………」そして三匹目の顔色を縦半分になり離し電撃か
ら逃れた。だけどダメージはかなり大きい「くそ………」あと二匹
か：片方が近づいてきたためすかさず一太刀浴びせる、血濺ぎが酷
くかかったがいまは気にしてられない。最後の奴の電撃を風刀で
防ごうとしたが風刀を弾かれてしまい電撃は直撃した。「ああああ
あああ………！！………」もう駄目かと思った。電気兎は【4つ】にわ
れた風車………？………というか、下を見た。穴。「ぎゃアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ああああああああああああああああああああああああああああ
あああ………！！………」ガシッ！！再びたすけられた：「おい、なにがあ
ゲシ！！」「ぐふっ………！！………」背中からその人が「蹴って」きた
のだ。地面に叩きつけられる魔王「イテテ………」「う……大丈夫ですか
！………；」「おまえこそ大丈夫かよ………というより………」「やあ」「な
んでお前がココに………？」「いいじゃないの、別に、いやあ助かった
よ、穴から落ちたと思ったら良い具合にクッションがあってww」「
いい笑顔だった。「っていうかキリノは？」」「上で気絶してるよ？」
「なあ………！！………；」「久々に会ったからつい嬉しくてね」「ニコニコ
「帰れ」「君だって久しぶりなんだからもっと話そうよ」「帰れ

「！！」「もー、つれないなあーくん」「略すな！！！！！！」「ほんと大きくなって…はじめて会った時は」「言うな！！！！！！」「何があったんだろう、とか仲いいな。ズキッ」「ツ…」」「どうした？」「ちよつと電気兎の電撃が…やけどしたかな…」」「してるな、ソレは、あと…キリノを起こしにくぞ」「あ、はい」

19 (後書き)

犬買い始めて・・・ベルってつけたW
W

20 レギ編2

クイックシティに帰ってきた。「レギ?」「…」「レギ!!」「あ!?!?なんだよ」「さっきからおかしいぞ?」「キリュウだっておかしいだろ:さっきからなんで睨んでくるんだよ?」「…」無論睨んでなどいない。おもいすごしかごまかしか:どちらにせよおかしい。変だ。緊張している、ずっと戦っているみたいに。「なあ」

「…なんだよ?」「幽霊でも見てるのか?」「幽霊…?」
「…それが…?」

「そいつ!?!この場には俺とレギ以外存在しない。」疲れて幻覚でも見たか:?!もしかしたら視覚が変になる魔法でもかけられたか?「しばらく休め」次の日の事だった。レギは行方をくらませた。正確には「切り逃げ」をした。俺に向かって切りかかってきた。俺が刀を裁くとすぐに逃げ出した。その時の「変」は更に加速していた。きりつけて置いて「俺じゃない!!」

と叫んで逃げた。直ぐに追おうかと思ったが身体が小さい事を利用してネズミのように逃げてしまった。「どうしたのさ?」「!?!?だれだ!?!」「ちょ!?!?; ; ; 危ないから!?!; ; ;」「ベル:」そこにいたのは怪盗ベルだった。「誰か探してるの?」「息子」「むす:えええええ!?!あの息子!?!いつのまにお嫁」「あー:ソレについてはまだこんど話す」「それよりレギだ」「何があったのさ」(略)「ええ!?!?」「…どうした?」「刀に模様なかった?」「たしか四」「四葉刀!?!」「よくわか」「すぐ探さないとレギが危ない!?!」「ど:うしたんだよ?」「四葉刀は他を切る刀、じゃなくて:!!とにかくあの刀を使っていると捕まる!?!」「は!?!」「四葉刀は持つとき願いを契約する。もしその願いがとんでもないものだとしたら!?!」「…願い」最初あいつは:「多分、俺を殺す願いだな」「…緊急だし仕方ないか」「ベルは鈴を手でおおった「ナイト・サーチ」黒い影が北東へ「あっちだ!?!」俺たちは北東へと向かった。レギがいた。「…」「レギ!?!」「シュッ、レギは刀を抜い

た「レギ!! 刀を捨て…!!?」刀の持つ所からのびる管のようなものがレギの手に無数に食い込んでいた。「何!?!」「やはり喰われた…のか…」「喰われた!?!」「願いを取り消すと決めた奴は喰われる…とにかく刀を折れ!!」「わか…」「ヒュン!! レギの刃はキリュウの頬に新たな傷をつけた。「ツ!?!」「ナイトワールド!!」あたりは真っ暗になった。レギは一瞬とまどった。「う…あ…」ソレは刀を折るのに十分な時間だった。パキィ!! 刀はおれた「秋…刹那」刀からでていた管のようなものは自然とレギの手からぬけていった、が、「すぐ医者へ!!」「は!?!」「毒だ!!」「なんだって!?!?」

20 レギ編2（後書き）

日本史赤点（。▽。）

ケロベルトさんが帰りカツカラ山は静かな時が流れた。レギが少し心配だけどレギはレギだし俺は俺のやり方がある。ふと足元を見るとネズミをのせた猫があるいていた。「めずらしい……」「そんなに珍しいか?」「………しゃべった!? モンスター!?」「モンスターでもいいだろう? お前さんモンスターを狩れる人間だろ?」「………」「さて、ここいらにキリノがいるはずだが……」「アレックス!!」「師匠が慌ててこっちへ「久しいな」「久しぶり」師匠嬉しそうだな。「ところでこのガキは?」「ルギです」「弟子のルギ、今修行中」「ほー」「あのー…この方は?」「アレックス、まあ僕の兄弟子……」「……まあそんな所だ」「鼠の………兄弟子?……」「まああの化け物の気にあてられてモンスター化した鼠だと思っておけ」

○年前

「師匠、何してるの?」「んーオモチャで遊んでるんだよ♪」師匠は鼠の尻尾をもってぷらんぷらんさせてる「チュー!!!!!!」「可哀想だよ……」「そーだなー、アレックスと名付けよう」(聞いちゃいないよ……)二週間ほどしたある日。「ジュース?」「魔力がみなぎるジュース」「それジュースじゃないよ!!!!!!」「アレックスに飲ませていた……しかし変化は起きなかった。崖に生えていた茸をとろうとした時。足元が崩れた。肩にはアレックスがいた。「ああああああ!!!!!!」「アレックスは素早くまだ無事な所にいき、キリノを掴んだ。」「…………!!」「アレックス!?……」そのままアレックスはキリノを引き上げた。「はあ!!!!」その時からアレックスは喋るようになった。

「なつかしいな」「アレックスが飼われていたのは僕が師弟になる前

だったからね」「……………」」「なっとく出来んのなら一本やるか？」「是非お願いします；；」アレックスは猫から降りた。四足歩行に変わった。「来い」鼠とは思えない気迫。「手加減はしてやる」「……………いきます」足を踏み切り小さな身体に風刀を叩きつける「風車！！」、が、ふりおろせない。切られたのだ、風刀を。「なあ！？」「風刀流奥義、刃……………勝負あったな小僧。なかなかの風車だった。」「…や、刃？」「刃、まあ刀を切る技だと思えばいい……………まあ風刀流をつかっていけばいつか分かる…この奥義の大切さがな」

21 (後書き)

テスト終わったよ

22 (前書き)

キリユウ視点

「というわけでレギ借りるね」そういつて兄貴はレギをつれてつて
「で、どこか行きたいところあるか？」ルギを預かっている。「い
え、特に…」「そうか」仲良くしろなんていうわけにはいかんしな
ー悪いのは明らかに俺だし。「…大丈夫か？」「え？」「いや、俺
と一緒にいても辛くないか？」「…大丈夫です」にこっと…うわ作
り笑顔…「あんま無理すんな…」「無理なんてしてませんよ…」
「…ま、とりあえず大通りでもいくか」「…？大通り？」「ああ、
服や野菜、アイスなんかも売っている」「…あ、あい…す？…」
「やっぱお前もしらねーんだな」そして「アイスひと…」「あんた
また子作りしたの…」「…ころされてーのかてめえ（怒）『レギの
兄貴』預かってるだけだ」「レギちゃんの？ふーん、で、何味？」
「どれがいいか？」「…？？」「ばにら？ちよこ？いちごは確か甘い
赤いのだよな？きやらめる、ソーダ、ピーチ…？？」「…お、お勧
めで…」「…あなた全部知らないって顔してるわね…」「…ごめ
んなさい、最近この付近にきたので…／＼」「あら？レギのお兄さ
んにしては随分素直ね」「…！お、弟が何かご迷惑しましたか？す
みません」「いいおにいさんじゃない、キリノに似て」「まあ師弟
は似るっていうからな」「お勧め…ねえ、レギはキャラメルが好き
っぽかったけど？」「じゃあキャラメルで」「はいっ」「ええっと
120マルだよな？」「サービスよ、今日はいいわよ」「そうもい
かんだろ…」「会計を済ませたキリユウさん、椅子に座り食べてみ
る、…！／＼」お？ガキ…食い物釣り成功かな？アイスを食べ
終える頃には夕日が沈みかけていた、そもそもここについたのが3
時ぐらいだからな…「ほんじゃ行くか」「？あ、寝床探しですね」
「今は治安がいいからな、寝床探ししてる奴はまずいねえよ」「え
っと…家ですか？」「アジトって方が正しいけどな」「…そうです
か」俯き癖なんてコイツには無い、ずっと俺を直視出来ていない。

アジトに着く「寺!?!?」 「見た目はな、帰ったぞ」 モンスター
が寺からいっぱいでてきた。「」「」「おかえりなさい!!」「」
「「うわっ!?!?」 「あれ? レギは?」 「今日は帰ってこないけ
ど 今回は 探さなくて いいぞ」 「申し訳ありません」 「あやま
んなんて、お前は別にわるかないからな」 「」 「夕飯をとる、そし
て「俺の隣でも寝れるか?」 「」 「外で寝ますよ」 「駄目だ、ここで
寝ろ」 「」 「あの、この状況下でそこで寝ろって……」 「モンスター
たちは2匹で一つ布団をつかっている、そしてキリュウさんは自分
の潜った布団をすこしめくり叩いている「いやでも寝てもらうから
な」 「」 「はい……」 「途中でぬけだせ……無理かな?」 「やっぱり……そ
」 「外はモンスター沸くぞ?」 「」 「やっぱりここで」 以外にもルギが
寝付くのは早かった。警戒して寝られない可能性もあったが……案外
……早く仲良くなれるのかもしれない。そつとルギの頭をなでる、「
ん……おかあさ……」 ……その言葉に酷く胸をえぐられた気がした。

22 (後書き)

ほんっとおおおおおおに遅くなりました

更新はじめます!!;;

え?腐むけ?

ああカップリングの事か

いいか?ずばりいうよ?

自分の中で思うのがカップリングだ

しかし作者の中では

シヨタは総受けだ

さてさてテストも終って夏休み

宿題はんばないれす;;

23 (前書き)

ここからシリアス度＋B L度が増していきます

苦手な方は別の妄想で乗り切ってください

あと短い

雷海賊団はちいさな港に船を止めていた。「おとーたん!! つえて
 って」 「まあまあ、まず見て安全を確認してからだ」 しばらく港
 を歩く。そして突然トラに乗った少年が襲いかかってきた。直ぐ様
 よけた。「見つけたぞ腐れ外道!!」 「…皆は下がれ」 「はっ!!」
 手下たちは下がった。「お前は俺に恨みがあるのか? 復讐でもしに
 来たのか?」 「ああ復讐さ、村を…俺の村をめちゃくちゃがっ
 て!!」 少年はナイフで切りかかったが全く刃がたたない「!?!」
 「ナイフなんかじゃ俺は切れねえぞ。それよかすまんかったな」 「
 !?! 五月蠅い!! 俺は貴様の言葉など耳をかさん!!」 「そうか…
 ……」 がっ!! 少年は首に衝撃を感じ気絶した。ライキは部下に少
 年を船に運ばせ柱に縛らせた。少年は目を覚ました。「目、さめた
 な」 「!?! リッチはどこだ!?!」 「わりい、牢屋に入れさせてもら
 った」 「…」 「名前を聞こう」 「……………」
 「……」 「はあ……………」 「ニライ」 「!?!……………」 「誇り高きライ
 一族の次男だ、てめーが殺したヒライの弟だ!!」 「……………」 三
 番目は? 「…母親ごと拐っていったのはお前だろうが!!」 「…
 ……」 家族が…いたのか? 「当たり前だ!!」 「ミライをここへ」
 手下にミライを連れてこさせた。「おとーたん、どうしたの?」 「
 ミライ、よく聞け、お前の家族が見つかった」 「!?! ミライ……………」
 だと!?! 「……………」 縄をとけ 「!?! ですが……………」 「いいから解
 け」 手下たちはしぶしぶニライの縄をといた。「ニライ、ミライは
 お前の妹だ」 「……………」 母さんは? 「……………」 死んだ 「何で…妹だ
 け…」 「……………」 そういう状況になった。それだけだ

23 (後書き)

俺は今から宿題をやる、あるものを4ページうつし、漢字練習を1ページやる

そして終り次第24話だああああ!!

実はすでに27話まで出来ているからな!!

ばんばん投稿するからな!!

24 ライキ (過去編) (前書き)

終わらないのに投稿しちゃった☆

24 ライキ (過去編)

海賊、雷海賊団、船長ライキ。「おい、酒がたりねーぞ」「飲み過ぎっスよ…そのく」「俺様に指図するな……」ライキは手下の首を跳ねた。「ひいっ!!」「さあ、酒だ酒!!早くもってこねーと次の首が飛ぶぞ!!」「い、イエッサー!!」そんな時だった。「お、お頭あ!!眼帯のもののすごい奴が船な乗り込んできやした!!」「あ?俺様に逆らう奴か…クズが」表へ出る。後ろに移る赤い月、そして小さいながらに中々の腕だという事は一目で分かった。周りに倒れてる手下。そいつは言った「ライキはいるか?」「俺様がそうだ」「そう、悪い人なの?」「…ああ」「本当に?」そして首を傾げた。おかしい奴だ。「当たり前だ、海賊だからな」「でも賊がつくからって悪いわけじゃないから」「お前さん…名前は?」「キリノ」「聞いた事ねえな…賊がつきや悪いに決まってるだろうが」「弟は盗賊だけど…悪い子じゃないよ」「盗賊が悪じゃないなら何が悪だ?」「知らない、モンスターかもしれないし魔王かもしれない、君かもしれない」「ほー」ザクッ!!キリノの肩に刀を切り裂いた。崩れる身体。「俺様の手下にな……」気絶していた。「ちっ…救護室にはこんどけ」そしてその夜の事だった。寝苦しい…薄っすらと目を…開けなきゃ良かった、目の前でキリノはスヤスヤと寝ていた。ベッドを間違えたというよりは潜り込んだが正しい。「んなああああああ!!?」「ん?おはよ」「まだ夜だ!!」「なんだまだ夜かお休み」ぐーぐー早いなヲイ!!じゃなくて何なんだコイツ!!寝てる状態のキリノを摘み上げる。「ん…ん!?」突如目を開く、といか刀傷が酷いコイツを乱暴に摘んだわけだから当たり前だが。「いだだっちょっとな!?!痛いよ!!」「だろうな」部屋の外へぶん投げた、力いっぱい。の筈だったのに。朝目が覚めたらまたいる。殺す気でぶん投げたはずだったのに生きている。丈夫な奴だ…「起きろ」「ん…朝…?」「ああ」「ふああああ」気の

抜けた欠伸だった。「なんで死なねーんだよ」「…わかんない」キョトンとした顔だった。「それじゃあね」出て行こうとするソイツの腕を掴む「何処へいく?」「ごはん取りに行くんだよ」「…:勝手に行け」…アレ?俺夕べ殺そうとしたよな?ポンっキリノの肩を軽く叩いた。「いっ!?!?」「?!!?」アレ?何時もなら…傷口抉るのが楽しいのにな、何か…おかしい。っていうか多分コイツがよっぽど変な奴すぎたんだろう。「帰れ」「どこに?」そういつて首をかしげた。その時だ。「せんちよおおおお!!大変です!!」「!!どうした!?!」「モンスターです!!とびつきりでかい鯨のモンスターが!!船にむかってきてま…」ん?キリノがいない、まさかアノヤロー外に!?!?!その時からだった。俺自身が…外道を捨て始めたのは。

24 ライキ (過去編) (後書き)

<http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question/detail/q1268055727>

意見下さい

そして力を下さい

宿題おわんないと小説がかけない

っていうか宿題の量が半端無いから

ちやっちゃんとやって続きを書きたい

うゝむ

5段階の2なのに補修課題あるとか↑宿題の5分の3はコイツ(T
(T)

25 ライキ（過去編）

俺がそこで見たのは。馬鹿でかい鯨モンスターを一撃で仕留めた奴だった。「大丈夫？」そういつて汚した手下に近寄るキリノ。「うゝ」怯える手下。わかってないキリノはますます手下に近づき「救護室行く？立てないみたいだけどゝ大丈夫？」大丈夫？じゃねえよモンスターじゃなくてテメエに腰ぬかしてんだよ手下は！！「おいお前！！」キヨロキヨロするキリノ「テメエだよ！！」「あ、僕？」「テメエ以外に誰がいんだよ！！」「鯨ちゃんとか」真つ二つに切っておいてちゃんづけゝこいつ俺より外道なんじゃねえか？「そんなじゃ帰るね」「な！！」「？」「帰れ！！」「うん帰る」そしてあっさり帰ってしまった。いままで逆らった奴や気に食わないやつは生きて帰すことが無かった。そう、生きて帰したら駄目なんだ。海賊だからゝ？俺は自分が楽しけりゃいい。もう「あの時」ほど俺は弱くない。だがなんだこのイライラというかモヤモヤは、心の中に何か妙なもんが入ってきやがる。「おかしらあ女がまゝた暴れてますぜー」「ふん、ほっとけ」どっかの小さな村で浚った人間。中々の上玉だった。それから結構な頻度でキリノは来るようになった。手下からの信頼もあり、友だちといった感じになった。今までずっと手下以外とまともに会話してないからなゝ。ぐゝぐゝ、そして毎度毎度こいつはどうやって俺のベッドに潜りこんでんだよ、もう慣れたけどゝその頃はキリノの存在を不思議な奴から、親友までいきかけていた。そんなときだった。キリノはゝ女を逃がした。

25 ライキ（過去編）（後書き）

まずヤフーで意見をくれた方

ありがとうございます！！

わかりました

腐向け要素追加と詳しい背景の描写ですね！！

がんばります

あとごめんなさい雑談カテゴリーでした

次からは「読書」のカテゴリーでやります…；

お礼詐欺はもうしません…；

わーい頑張るぞ！！♪

というわけで

次の話かけてるんだ

連続だぜ！！♪

26 海賊ライキ

「いいかライキ、海賊ってのは人を易々と信じちゃいけねえ、だ
ど親友ってのはいいぞ!!、そういう奴にお前も出会えるといいな
がっはっは!」…親父…その親友に裏切られたとき…どうすればい
いんだよ? なんせ喧嘩をした事がない、親父が死んだときも辛かつ
たがソレに似た辛さだ。砂浜でキリノを見つけ殺す気で切りかかっ
た。しかし今回はキリノの刃によってふせがれた。「キリノ!! な
ぜうちの女を逃がした!?!」…「キリノは首を振った」逃がした
わけじゃない」「は!?! いまさら屁理屈こねたっておせえんだよっ
!!」そして戦った。雷の剣をもつてしても強かった…ガードしか
してなかったけどな今思えば。「あつぐ!!; ;」腕をへしおっ
ちまったからな、もうふうとうとやらは使えないぜ…?」そして外
道、今思えば本当に恐ろしいが、キリノの眼帯をしている目に、刃
を 何度も 突き刺した。アレで良く死ななかったなアイツ。そし
て血みどろのまま砂浜に放置した。死んだと思った。手下の一人が
「生きてたら女の居場所はかせられるんじゃないっすかね? 生かし
てもいいんじゃないですか?」「…かもしれんな」すると他の手下
も「なにか言いたそうでしたし…」「もしかしたら事情があったの
かも…」「…わかった、キリノを運べ」昔から顔なじみのつつて
も親父の浮気相手の医者にキリノをはこんだら「キリノさん!? キ
リノさんしっかりしてください!!」「なんだ、知り合いか?」「
酷い怪我…」手当てをうけさせる。そして言われた「出血も酷いし
…目は最悪失明するわよ、あなたいったいなんでキリノとこんな事
になったの?」「…キリノが俺の女に手を出した」「そんな訳ない
でしょ!」「…?」「キリノは…いやその女…フーライさんはここ
に入院してる」「!?!? な!?!? どこか悪かったのか!?!」「まあ悪い
といえば死にそうなぐらい弱ってるわよ」「びよ、病室は!?!」「
ストップ、あなたフーライとけっこうしたしくなっただんですってね」

「ああ、ともか」「今は無理、教えられないわ」「なんでだ!!」
「キリノが生きてたら…真実を告げてもらうわ」「真実?」確かに
監禁はしていたが、キリノは監禁自体を咎める事はしなかった。お
れの「女」である以上の関係はなくとも、キリノと出会い「殺し」
より遥かに楽しい事もあると分かった。「…涙ふいたら?」「!!」
泣いてる?俺が?「あんた昔からすぐ手だしちゃうから気にはして
たけどね…」そしてうっすらと目をあけるキリノ。「気がついた!
!」「…ライキ…は?」「そのド阿呆ならここよ」「…なんで俺の
女を?」「……」キリノは辛そうに息をしていた。けど言った「
家族…おめでと…」たった二言だった。「!!…ま、まさか!?!」
「そうよ、あんたの子よ」「……」キリノはそれだけいって大人し
くなった。そして「先生!!大変です!!フリーライさんの容態が!
!」フリーライの部屋にいくと赤ん坊が泣き、母親、フリーライは死ん
でいた。そして最後に「ミライ…名前…」といったらしい。

26 海賊ライキ（後書き）

ごめん遅れたW
W

まだまだ修行がたりないな。風車を上手く使えず、地面に大きくヒ
 ビが入ってしまった。当然のように落ちていく俺。「ぎゃああああ
 ああああああああ!!」落ちるの何回目だよ!!;; ;そして今回
 は黒星：だったかな?さんに助けられた。「何してるんですか?;; ;
 」 「し、修行してたら突然足場が崩れたんです;; ;」 「最近地上が
 脆くなっていましたからね;; ;」 以外と普通だなー、「あ、そうだア
 ークさんに渡すものが;; ;」そしてかけて来た黒いその人「またかお
 前は!!;; ;」 「あ、アークさん;; ;」 「キリノが上で心配するか
 らな、早く戻れ」 「あ、その前にコレ、キリユウさんにもたされた
 お土産のちょこ;; ;」 「;; ;」 すごく嫌そうな顔をしたアークさん。「
 あ、チョコおきらい;; ;でした;; ;か?」 「俺が食うのはこっちだから
 な」 そういつてガシツと腕をつかまれ首筋に噛み付かれたような感
 じ、実際痛くないからかんではないかな? 「きゅ、吸血鬼!?」 ご
 っく。 「!!」 なんんだか心があったかいというか;; ;霧がはれてく
 ような「ぷはっ;; ;どうだ?」 「なんかスツキリしたような気がしま
 す」 「俺が食うのは「不の気」と呼ばれる物だからな」 「;; ;」 「ち
 なみに味や量は本人が辛いと感じた分だけです」 「;; ;まずか」 「
 おいしかったぞ、かなり」 「;; ;」 これ遠まわしになだめられてる
 のかな? 「キリノの方は量が凄まじいけどな」 「師匠;; ;」 まあ、色
 々あったんだろうな、背中傷だらけだし: 「それじゃ戻りますね、
 ありがとうございます」 「作り笑いなんかするなよ;; ;」 「作っ
 てるつもりないんですけどね;; ;」 「帰り道の事だった。」 「見つけ
 た」と声がしたので師匠かと思いきや、知らない人: いやモンスター
 ー、いや「さて、こうも都合よく一人とは;; ;」 「!!」 「え;; ;エン
 ドリスト!?」 「ふん、そうだとっても状況は変わらないだろう」
 「っ!!」 風刀を抜くのが間に合わなかったら死んでいただろう。
 キイーン!! 洞窟に刃の混ざる音が響く「俺は「勇者」じゃない!

！」「それでも俺らにゃジャマでね」がつ！！腹に蹴りを入れられ吹っ飛び壁に激突した。その時「よわいな…」ダンッ！！地面にそいつが手を叩き付けた。ボコボコとでてくる、白き死者、ガイコツ。皆盗賊の格好だ。「き…りゅう…」「！？」その骸骨はキリュウの名を言った。そして直ぐにくずれた。「チッ使えない役立たずが…」「！！」エンドリストの刃が襲ってきた。咄嗟に急所を避けたが、「あぐ！？；；」肺…に刺さった…！？「ふん、弱いな」「…」死ぬ…このままだと…殺される…でも息が…意識が「勇者は…上か」コツコツと遠ざかるエンドリスト。薄れ行く意識の中で、「キリュウ」の一言が再び聞こえた気がし…

目がさめた。自分くらいだと思う、エプロン着てる魔王と目が合つて「そっち」の理由で目をそらしたのは。「大丈夫か?」「ええまあ」「ちょっと痛い」「ってちょ!」「つい起きてしまった」「ッ!」「ば、馬鹿!」一時処理だ!! 穴が開いてんだぞ! ?寝てろ!」「はい」「ごもつともだ」「って何で助かってるんだ俺!」「あー、まあ薬だよ」「そんな高いもの」「馬鹿かお前」、モンスターの巣から取れる薬は上級なほど効き、尚且つ俺が誰であるかもう話した筈だぞ?」「そうですね」「困りながら笑うとドヤ顔の口になるな」「ごめんなさい」「それは兎も角、何があった?」「え?俺を助けてくれたのアークさんじゃないんですか?」「キリノだよ、俺はお前とキリノがぶつ倒れてるのをこっちに連れてきただけだ」「き、キリノさんが倒れた!」「傷口は全て浅い、少し血が多く流れて貧血を起こしただけだ、お前の方が重症!」「で、何があった?」「エンドリストという集団の一人と戦いました」「そうか」「心当たりは?」「さあな」「うん、なんだろうこの、妙な違和感。」「どうした?」「あ、その、なんというか、違和感が」「?」「あ」エプロンの存在に気づく魔王「脱ぐか」「ぼいっ、うん、まあ違和感はなくなっただけ。」「全く、なんで弟子入りなんかしたんだか」「お前さん、これからもうこういう目に山ほど遭うぞ?やめるならいま」「とアークさんが言おうとしたとき」「とっちゃやだああああああ!」と泣きながらキリノさんがアークにしがみついていた。「とらねーよ!」「ヤダヤダ絶対僕の弟子だもん!」僕のだもん!」「びえええええええ!」「わかったから!泣くな!」「本当?」ぐすっ「本当だ、だいたいルギがそう簡単に止める訳ないだろ」「もちろんです」ぎゅうっ「って!」「キリノさんに抱きつかれた。」「よか

[illegible]

「やあ!」…。目の前に広がる蛙。そして縛られた魔王アークさん。「おはよう」につっこにつこ、ケロベルト…さん「何のつもりだケロベルト!」…」魔王様でも縛られるってあるんだな。っていうか何あの縛り方…」「そしてお前はこっちを見るな!」／＼「はい」「今日はこれ渡そうと思ってね」ケロベルトさんは帽子の中から手紙を出した。「手紙…ですか?」「5日後、ぽかぽかタウンにエンドリストが現れる」「!?!?なんで分かるんですか!?!?!」「聞き出すのに苦労したよ〜とにかくこの地図の場所に5日後きなさい…断ると死ぬよっていうか殺るよ?」につっこにこ。キリノさんは…奥のしかばねみたいなのやつか?「あの、なんでこれを俺に?」「…なんでだろうね?」そういつてさつていった。なんだろう?ひどく不気味なはずのその一言、えらく落ち着いていた。とにかくアークさんの縄をほど…「あの、ほどけないんで切っちゃっていいですか?」…」「ああ…」「いきますよ」風刀を出し、アークさんの縄をきる。そんでキリノさんを起こす。「!?!?!」目を回しているだけだった。身体に傷跡なんてない。どういう事だ?「はあ…でソレの中身は?」「あ」そっか、手紙うけとったんだった。「ええっと」白い封筒、蛙のシール、蛙の部分をはがし中身をみる…「ぽかぽか温泉ゴクラック宿泊チケット」が「いち…に…さん…し…ご…六!?!?!」それと手紙「ルギ・キリノ・アーク・ダクウ・シロボシ・クロボシのぶんだよー(^^)」「…ダクウまで?しかも白星黒星も?何考えてやがるんだバ蛙め…」バ蛙…;

29 (後書き)

テストがちかい ($\wedge$ q $\wedge$)

「久しぶりねキリノ怪我増やしてないでしょうねえ？」スミレさん
 医者だからなーキリノさんはというと「……えっと……その……」
 「あー！！まーた傷増やしてる！！何度いったら分かるの！！（怒）
 」ぽかぽかタウンについた。そして「所であなたたちもあの蛙さん
 に？」蛙さん；；「うん、師匠に呼ばれた」ダクウがはしゃぎまわ
 っている、気持ちは分からなくも無い、小さな子供が遊ぶには、あ
 の洞窟は狭い、いや、うーん、まあ「なんだこれ！？赤いぞ！！こ
 っちは黄色だ！！」「あゝそれは花だ」「花って紫しか無いと思っ
 てた」「……」ソレ……毒草の事か？；；そんな感じで宿に行くと、
 見覚えの有る2人と宿の女将さんらしき人が立っていた「よお兄貴」
 「キリュウ……」「あ、おにい……兄貴じゃんか」「今お兄ちゃんって
 言いかけただろ（へへ＊）」「う、うるさい！！／＼」最近思う、
 このツンデレは多分……、ジーっとキリュウさんの方をみる。「？」
 ……遺伝……「キリュウさんって……」「なんだ？」「可愛いですよね」
 そして笑ってみせる「っ！？／＼」ほら遺伝だ……；「なananなんな
 ん何言って！！」「レギに似て」「……逆じゃね？……」「へー、仲
 良くやってんじゃん」と女将さんがいった。でもその声は男の人の
 子供っぽい声だった。「……からかいやがったな」「気づかないお前
 が悪いんだからな」ざああああああああ、女将さんは怪盗ベル
 になった。「久しぶりだなーブラコン二人組」レギが「なーブラコ
 ンってなんだ？……？」というので「兄弟が大切に大切にしかたねえ
 っつう人の事だ」まちがっちゃいねえからな。「なんだ」「………
 ？」遠くで何か聞こえる 離せ……ろー！ や……ね そして声はどん
 どん近づいて……「ライキさん！！」「よお、勢ぞろいじゃないかい
 なんか知らん餓鬼もおるが……」ジーっとクロボシを見る、ささっと
 白星の後ろへ「こおら、挨拶しなさいっていったでしょう？」「く、
 クロボシ……」「あっはっは！！将来がおもしろそうなこだな！！」

「…であなたの手に持つてる少年は誰ですか？」 「息子」 そしてくっついていたミライが 「おにーちゃん！！」 あーこっちとにたような境遇くさいなー、 「はじめまして！！ 僕キリノ！！」 「ニコニコなでなで、 むう…少し羨ましい、 「なにしやがるううううううう！！」
「；；；」

30 (後書き)

次回〓今日中

ケロベルト「部屋割だけど僕が決めるから!!」 「え?」ギロ!!
!!!!!!、笑顔なキャラクター程睨まれると怖いよね:「という
わけで、ここがライキとレギ」 「よろしくなー坊主」 「坊主じゃな
いレギだ!」 「あっはっは年頃の坊主だな!!」 「だからレギ!!」
「わかったわかった宜しくなレギ」 「で」ケロベルトさんは次々に
部屋を決めていく、そしてラスト「……………俺は部屋無しって事で
すか?」 「いや?僕と相部屋」ニコニコ。「はあ……………」 「さ、
入って?」 「は、はい:」 中に入る。 って:布団だ、久しぶりにし
き布団をみたな:しかもコレ繋がり布団:「さて:」ケロベルトさ
んは一体何を考えているんだろう? 「ぶはあー」 って「いつのまに
タバコを!」 「ん?今ダヨ今、お前案外タバコ吸える奴だったん
だな」 !!!自分の懐のタバコすりやがった!?!?! 「でもキリノ
の側だと吸わないね」 「:ええ」 「ふふふ:三歩下がちなさい」 「
?」 1. 2. さンドスッ!! 俺のいた所に槍が突き刺さった。 「!
!」 「:天殺」 ひゅん!! ケロベルトさんは上を確認もせず突き刺
した。長く伸びた風刀からつうつと赤い血が流れてきた。その時ケ
ロベルトさんは:目を開け、笑った。

「なかなかいい宿だな、そう思うだろ坊主？」「レギだ」「あ、そうだったなレギ」「なんでそんなに楽しそうなんだよ、エンドリストの情報で来たってのに」「まあアレだな、慣れって奴だ」「慣れ：」「まあ15？あたりか？そんな年じゃ分からんかもな」「年なら10だ」「幼っ！；；；」「：（怒）」「あっわりいわりい、大人っぽく見えたって言ってるんだ」「：／／（喜）」「まあ10らしい奴ではあるな、もっとも俺からみたらキリユウもキリノもガキだけど」「ガキって言うな！！（怒）」「：お前さんがキって言葉嫌いなんだな」「嫌いだ、いや大大嫌いだ」「まあいいや、風呂行こうぜ」「？風呂？」「おまえさん風呂しらねえの？」「知ってはいるけど：なんでこんな時間に 川 行くんだ？」「よし今すぐ行くか」んで「おー偶然だなキリユウ」「偶然っていうか必然だろ」「まあな、ところでニライは？」「部屋、誘ったけど全然乗り気じゃないし：」「まあしゃあない、明日に期待だな：でキリユウ、お前風呂に入れたことないのかレギを？」「川で本人がかつてに洗ってるから必要な」「ある！！特に女湯の覗き方を教えるべきだ！」「真剣な顔で言うな！！；；；」「さて脱衣所な訳だが：「ったくまた傷増やしやがって」「それはこっちの台詞だ、なんだその肩」「あーこれ？娘への愛！」「：」呆れられた（・ω・）」「あと絶対レギにくだらないう事教えるなよ」「大丈夫だ心配すんな」とは言った物の：師弟揃ってこうも生傷が多いとは：「っていうかお前どんな修行させてんだ？息子に無理させるなよあんまり」「いや？そもそも俺は修行をつけていない」「は？」「ちよつと目を放した隙に外道盗賊から金品奪ったりイノシシや大ぐまと戦ってたりでな：；；；」「そりゃあ：；；」「生傷も耐えないわな：しかし「お前さんに息子ねえ、なんで隠してたんだ？」「隠してねえよてめえと同じだよ？」「え？何？村消し飛ばしたときの生き残りなの？」「前言撤回だ：

あいつの捻くれはソレが原因かよ」「で、お前らは？」「…まあ、出来たのに気がつかなかった…それだけだ」「なんだレイプの子ならそうといえればいいじゃねえか」ぐさっ「容赦ねえ言い方だな…」「事実だろ？」「はあ」レギが口を開いた「れいぷ？」「…なんでもない」「まあそのまえにキスとかから教えるべきだろ」「…レギに手だすなよ？」「まあださねーよ、多分、容赦ねえって…だいたにお前俺にれ」「ソレ以上いったら喉搔っ切るからな！！／＼」「れ？」

32 (後書き)

35話まで書けた

しかし終わりがみえん!!

終えられるのかこれ…orz

「じゃあまたな、身体壊すなよ兄貴」「大丈夫だよ」……あれから1ヶ月がたった。新しい技も覚えた。「風刀流奥義…浮き切り!!」ズバッ!! ついに『刀を振るわずに切る』という伝説の刀に一步近づいた。「お手紙でーす」と郵便屋(鳥のモンスター)が手紙をおいていった。「ええっと?」「あの、俺もみていいですか?」「読んで」「;;;…ええっと、エンドリストと接触した。直接話したいから来い…」「ふーん」そういえば一ヶ月会ってないな、びゅうつと風が吹いた「…」寒いな、今日。「それじゃ行こうか」「今日…ですか?」「明日」「ですよ」もう夕方だし。いつもどうり寝る、だけ…ど寒い

33 (後書き)

宿題がおわったたら34話とこうするよb

「…兄貴!! 1週間に1度連絡しろっていったろ!!」 「わすれてた…ごめん;;」 レギもムスツとしている「レギ、久しぶりだな…あれから何かあったか?」 「へへーん聞いて驚くなよ? エンドリストは俺が倒したんだぜ!!」 そしてどや顔。 : やれやれ「それで…けほっキリュウとは何かあったか?」 「…特になんもな…あえていうなら…うーん、…な、なんもねえな／＼」 良かった: DVはされてないな: 「っていうかなんで腕組んでるんだ??」 「え? 寒くないのか?」 「…:??」 「レギは俺の額に手をあてた「あつう!??;;」

「…つつめた!! まだお前冷え性治ってないのか:」 「どうした、レギ、久しぶりだな」 「キリュウさんお久しぶりです」 頭を下げた。「風邪か? すこし家で休め、あとなんか食べ、どうせろくなもんとってないだろ?」 「大丈夫ですよ1日1回はたべてま」 「1日1回…っておい少なすぎだ!;;」 「…:」 「まあとにかく家で休め」 家につき布団に寝かされる。「うーん、明日起きて熱下がってたらルギつれて帰ろうかな?」 「こどもの熱は直りかけが一番危ないからな、レギでつれていけ」 「わかった」 「…:」 その翌日になった。案の定ルギは38度の高熱。レギと一緒にいるとレギに移りそうなので兄貴に渡したし: それよりこの熱: 妙だ: 昨晚計ったときは36.7、で朝の今38.6という熱。「う: あさ?」 「無理するな」 「そういうわけには:」 ずるりと水で塗らしたタオルが滑り落ちた。「…………」 「頭の上にタオル置かれても気づかないんだぞ? 寝てろ」

ええっと、今日は出かけないといけないな：「だんご！！」「うん？キリュウどうしたの？」彼の：コイツは団子というなのスライム形モンスターだ。「出かけなきゃならんがルギ預かってる状況なわけだろ？、見張っててくれ」「見張る？」「アイツの危なさレギ以上だから気をつけろ」「…？しっかりしたお兄さんじゃないのさ」「だからこそ不安定なんだよいろいろと、我慢しすぎるタイプは崩壊した時が怖いからな」「ふーん、用事って定期会議？」「まーな、モクナにアレは譲ってるからやる事は特にないが出ないわけにはいかないからな」「ふーん、いつてらっしゃーい」「ああ、いつてくる」しかし不安だ：考えていても仕方が無いか、服を着替え会議場所へ、「あら？随分遅いわね来るの」「まー野暮用があつてな：ラルの連中が来てるって本当か？」「ええ、でももう大人しいわ」「ならいい」この会議も大分皆大人しくなったな、昔は本当になだめるのが大変だったし怪我じゃすまないやつも何人か出たし：「それでは盗賊会議を始めます：（略略略）」というわけで（略）なので（略）……やっぱり心配だ：あの残酷さを物語る刃をもっているわけだから：「ちよっと？顔色悪いわよ？悩み事？」「ああ、ちよっとな」「どうせレギ君が心配なんですよ？」「今は兄貴預かってるけどな」「あら？あ的一本縛りの眼帯の？」「俺の兄貴じゃねえよ！！！！；；レギの兄貴だよレギの、ルギっていう」「ふーん、身体が弱い子だったりするわけかな？そんな心配なら」「心配なのは『強さ』と熱が『40度』でてるこ「帰れ！！今すぐかえれ！！あ、プリンいる？」「だが…」「どうしたんすかー？」「レギのお兄ちゃん、まだ子供なのに家には^{アシト}あったらかしですって！！しかも40度も熱があるらしいのよ」「40！？」「帰ってください旦那！！あ、りんごどうぞ」「お前ら、何度もいうが盗賊会議におやつもってくるなよ……；；」「バナナはおやつじゃないぞ！！！」といいつつ

バナナスナックを取り出す手下一人「それはおやつだ馬鹿!!…はあ…帰る」

「…。っち！」誰だ家のドア^{アジト}けつとばしたやろう…ルギじゃないな…多分。「今帰ったぞ」「あ、おかえりキリユウ」「お帰りじゃねえよルギは!？」「ルギならここにいるよー」(一一)「ん?…なんだ普通に寝て…熱も下がってるな誰か来たか?」「えーとえんどりすってひとが」「なあ!?!?!見てろって言ったる!?!?!」「きちんと見てたよー普通の刀の方が強いじゃんかルギく」「ルギに普通　の刀握らせたのか!?!」「うん、えんどなんとかが「そんな弱くなるかたなはうんたらかんたらいってた」「…化け物にならなきゃいいが」「僕ら嫌い? (; ω ;)」「ちげえよ、風刀流は残酷さをセーブさせるための流派だからな」「…よくわかんない?」「…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9539s/>

アトガタリ

2011年10月31日15時14分発行